

・・・明治大学特別功労賞受賞者・・・

倉橋 由美子 (1935～2005) 小説家

高知県生まれ。土佐高等学校卒業後、明治大学文学部に入学。1960年、在学中に発表した短編小説『バルタイ』が明大新聞「第4回学長賞」を受賞。平野謙の文芸時評欄でとりあげられ、有望な新人作家として注目される。1961年に女流文学賞、1963年に田村俊子賞を受賞。1966年より米国のアイオワ州立大学に留学。帰国後、1969年に『スキヤキストQの冒険』を刊行し話題となる。1983年に『アマノン国往還記』（泉鏡花文学賞）、1984年『大人のための残酷童話』はロングセラーとなる。また、シェル・シルバスタイン『ぼくを探しに』、サン＝テグジュペリ『新訳星の王子さま』など翻訳も多く手がけた。現在も国内外から高い評価を集めている。2006年、本学より特別功労賞を授与。

阿久 悠 (1937～2007) 作詞家・作家・小説家

兵庫県淡路島生まれ。明治大学文学部卒業。広告代理店勤務を経て、放送作家・作詞家として活動を本格化させ、「また逢う日まで」「勝手にしやがれ」「UFO」など数々のヒット曲を発表する。手掛けた5000曲以上に及ぶその歌の世界は、アイドルから演歌、POPS、アニメ主題歌と多岐に渡り、世代を超えて日本人の心を捉え続け、「日本レコード大賞」「日本歌謡大賞」「日本作詞大賞」「古賀政男記念音楽大賞」などの賞を多数受賞。企画、審査員として携わったテレビ番組「スター誕生」では、森昌子、桜田淳子、山口百恵、小泉今日子など、多数のトップスターを輩出した。また、小説家としても活躍し、『瀬戸内少年野球団』は直木賞候補作となり映画化もされた。1997年、第45回菊池寛賞受賞。1999年、紫綬勲章受章。

・・・選者プロフィール・・・

生方 智子 文学部専任教授・日本近代文学研究者

1967年生まれ、東京都出身。

専門は日本近代文学・現代文学。成城大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程修了。博士(文学)。日本近代文学における精神分析の受容と影響をテーマに博士論文を提出し、後に『精神分析以前 無意識の日本近代文学』（翰林書房 2009年）として出版。近代日本で小説というジャンルが形作られる時代に、夏目漱石や森鷗外、田山花袋といった小説家が様々な枠組みに基づいて人間の心の有り様を観察し、言語化してきたことを検証した。近年では、若き頃の谷崎潤一郎の活動に注目し、当時の最新の文化を取り入れて文学が生み出される状況を検討中。また、現代日本の女性作家を中心に、文学やサブカルチャーの領域で「心」や「からだ」、ジェンダーやセクシュアリティがどのように表象され、文化にどのような影響を与えているかについても研究している。

三田 完 作家

1956年生まれ、埼玉県出身。

慶應義塾大学文学部卒業後、NHKでディレクターとして主に音楽番組を担当。NHK退職後、阿久悠の作詞、出版活動にブレーンとして関わる。2000年に小説『櫻川イワンの恋』で第80回オール讀物新人賞受賞。小説のほか『小沢昭一の小沢昭一的こころ』（TBSラジオ）の台本を執筆。著書に『俳風三麗花』（文春文庫）、『当マイクロフォン』（角川文庫）、『モーニングサービス』（新潮社）、『歌は季につれ』（幻戯書房）、『不機嫌な作詞家・阿久悠日記を読む』（文藝春秋）、『鶴』（角川書店）など。日本文藝家協会会員。

渡辺 響子 法学部専任教授・フランス文学研究者

1963年大阪生まれ、京都育ち。

専門はフランス十九世紀小説。学部の卒業論文は、テオフィル・ゴーチエにおける幻想小説、修士論文『都市と文学 十九世紀パリにおけるパノラマ的構造の変貌』ではオスマンの改革以前のバルザックと以後のゾラに見られるパリを比較検討。博士論文ではジョルジュ・サンドを中心に芸術家像、創造行為を論じた。共著に『ジョルジュ・サンドの世界』（第三書房）、*Éditer et relire la correspondance de Zola* (Presses Universitaires de Rennes), *Traduire Zola, du XIXe siècle à nos jours* (Roma TrE-Press)、訳書に『レジャーの誕生』『記録を残さなかった男の歴史』（いずれもアラン・コルバン著、藤原書店）など。最近では、近代西洋において身体概念がいかに変容し、その表象が変化したかをモーパッサンを中心として研究を進めている。また、文学作品を翻訳すること、二言語で創作する作家、母語ではない言語で創作する作家もテーマとして考察している。

井上 善幸 理工学部専任教授 教養デザイン研究科教授 ヨーロッパ精神史研究

1958年生まれ、兵庫県出身。

専門は20世紀ヨーロッパ文学および哲学。長年にわたりサミュエル・ベケットの研究に取り組む。在外研究では、英国のレディング大学にてベケットの草稿研究に従事。主な共編著書に『サミュエル・ベケットと批評の遠近法』（未知谷、2016年）、*Beckett and Animals*, ed. M. Bryden (Cambridge: Cambridge University Press, 2013)、共訳として、ジェイムズ・ノウルソン『ベケット伝（上・下）』（白水社、2003年）などがある。

大学院時代には、ベケット研究と平行してジャック・デリダの著作と格闘し、かれの思考をDNAとして取り込む。ホルヘ・ルイス・ボルヘスの精神史的解読にも取り組んでいる。